

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 8 月 9 日 12:55 AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 31,000～39,000 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 37,000～39,800 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 14,500～17,500

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000～151.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 99.578～108.350

(おしらせ) 次回レポートは 8 月 16 日(金) 発行予定です。

エリオット波動とは

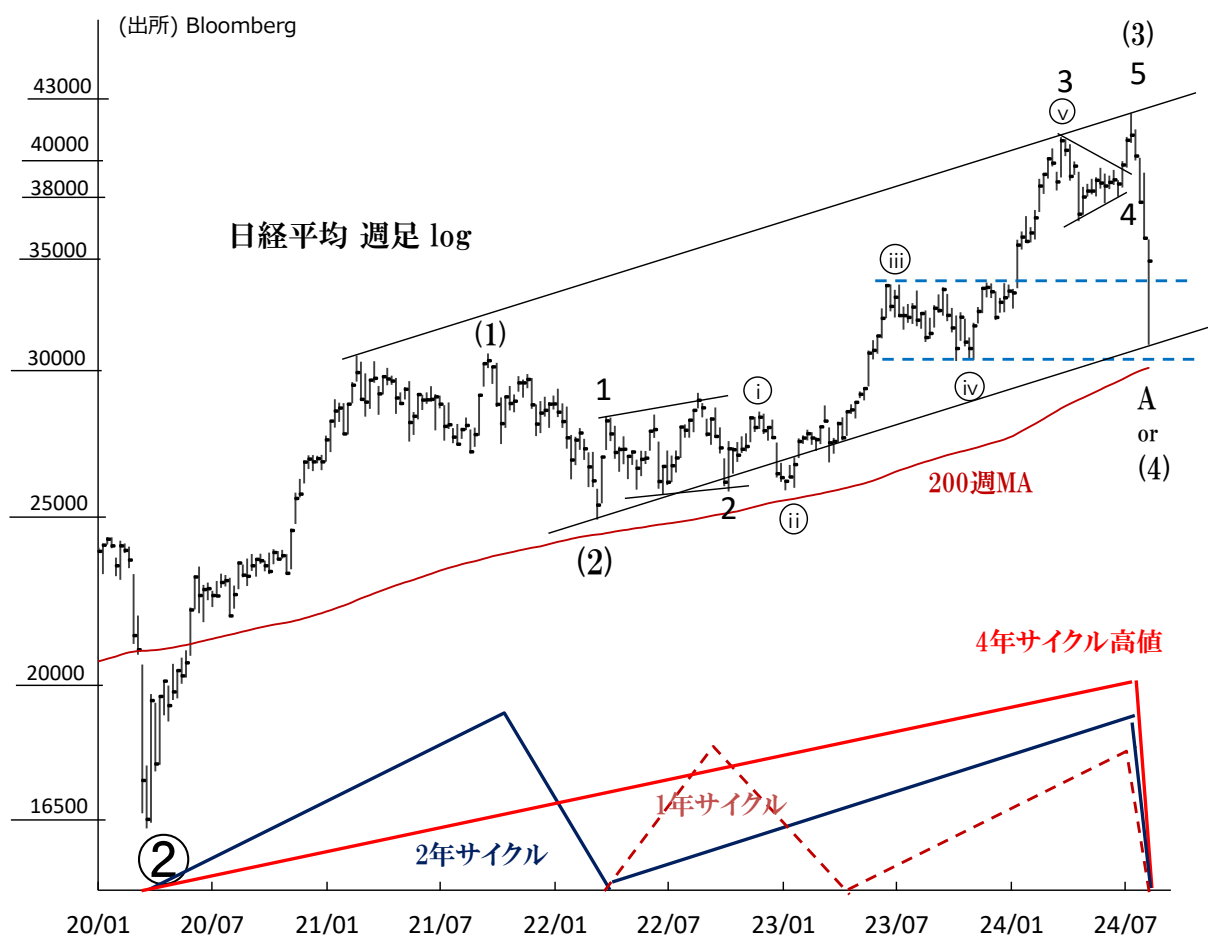
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足・エリオット波動分析】

42,426 円(7/11 高値)以来の第(4)波(インターミディエイト級)中 A 波は、31,156 円(8/5 安値)を以て終わった可能性があります。それは 4 年サイクル底に合致するものです。

08 年 10 月底以来、4 年サイクル底に向けた下げはいずれも「弱気相場」でした(12 年 6 月底は高値から 28.6%安、16 年 6 月は 29%安、20 年 3 月は 33%安)。今回、7 月高値からの下げ率は 26.5%であり、この大きなスケール感は 4 年サイクル底の深さとしての資格を十分に満たしています。

31,156 円は、週足チャートのチャネル下限付近の水準です。そして、21 年 9 月 14 日に付けた第(1)波の高値[30,795 円]、第(3)波レッサー・ディグリーのマル iv 波安値[30,583 円](※)に近いものでした。

(※) 第 1 波高値と第 4 波安値は通常、重なることはありません。今回でいえば、第(4)波安値が第(1)波高値(30,795 円)を下回ることはない、といえます。同様に TOPIX の現行の下げは、第(1)波高値(2120)を下回ることはないでしょう。今回想定される保ち合いでは、パターン終点の安値が第(1)波を下抜くことは決してありません。ただしパターン中 A 波の安値が、第(1)波の高値と(瞬時)重なることはあり得ます。



【日経平均 日足・エリオット波動分析】

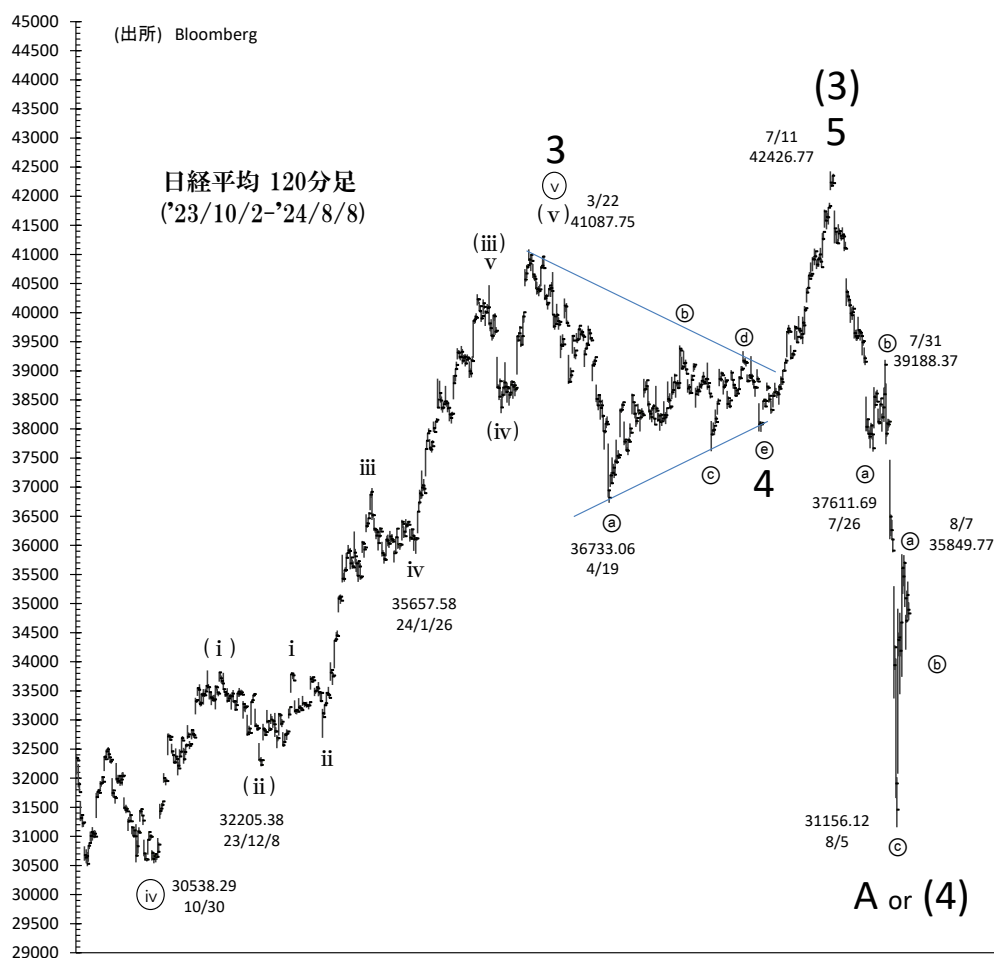
次に示すように **8 月 5 日の日経平均は一気に割安感を強めました。**

- ・日経平均総合かい離はマイナス 54%、コロナショック急落時(マイナス 72%)以来の「売られ過ぎ」に
- ・東証プライム市場の売買代金は過去最高(7 兆 9674 億円)。セリングクライマックス?
- ・予想 EPS が史上最高値(2418.01 円)となったことを受け PER は 13.01 倍に急低下
- ・株式益回り(PER の逆数)は 7.68%に急上昇
- ・PBR は 1.15 倍に急低下

アベノミクス相場が始まった 12 年 11 月下旬以来、PER は平均して 15.20 倍程度で、PBR は平均 1.24 倍強です。なお **EPS は翌 6 日も 2431.65 円へ上昇し最高値を更新**しています。

テクニカルからも投資尺度からみても、8 月 5 日の日経平均は信じられないほど割安になった、といえるでしょう。このとき日経平均は「陰の極」に達した可能性が高いのではないのでしょうか。

改めて 8 月 5 日安値は、4 年サイクル底に相応しいといえそうです。



【日経平均 時間足・エリオット波動分析】

31,156 円(8/5 安値)を以て第(4)波の A 波安値を終了し—あるいは(4)波自体が終わった可能性もあります—B 波によるリバウンドが展開中と思われます。

B 波は基本的に三波構成(Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ)による上昇で、その想定戻りレンジは [35,461 円~36,791 円] (A 波の 38.2%-50%戻り)です。

8 月 7 日高値(35,849 円)はレンジ内で付けたものですが、それはⒶ波高値に位置付けられます。目先はⒷ波による押し目、あるいは、保ち合いパターンとなるでしょう。このⒷ波を経て、Ⓒ波による上値試しに発展することになりそうです。

ブラック・マンデー急落(87 年 10 月 20 日)の翌 21 日と 22 日に、日経平均は下げの 61.8%を取り戻しています。今回でいえば A 波の 61.8%戻りは[38,121 円]であり、この水準に B 波が届いてもおかしくありません。

NY ダウ



【NY ダウ日足・エリオット波動分析】

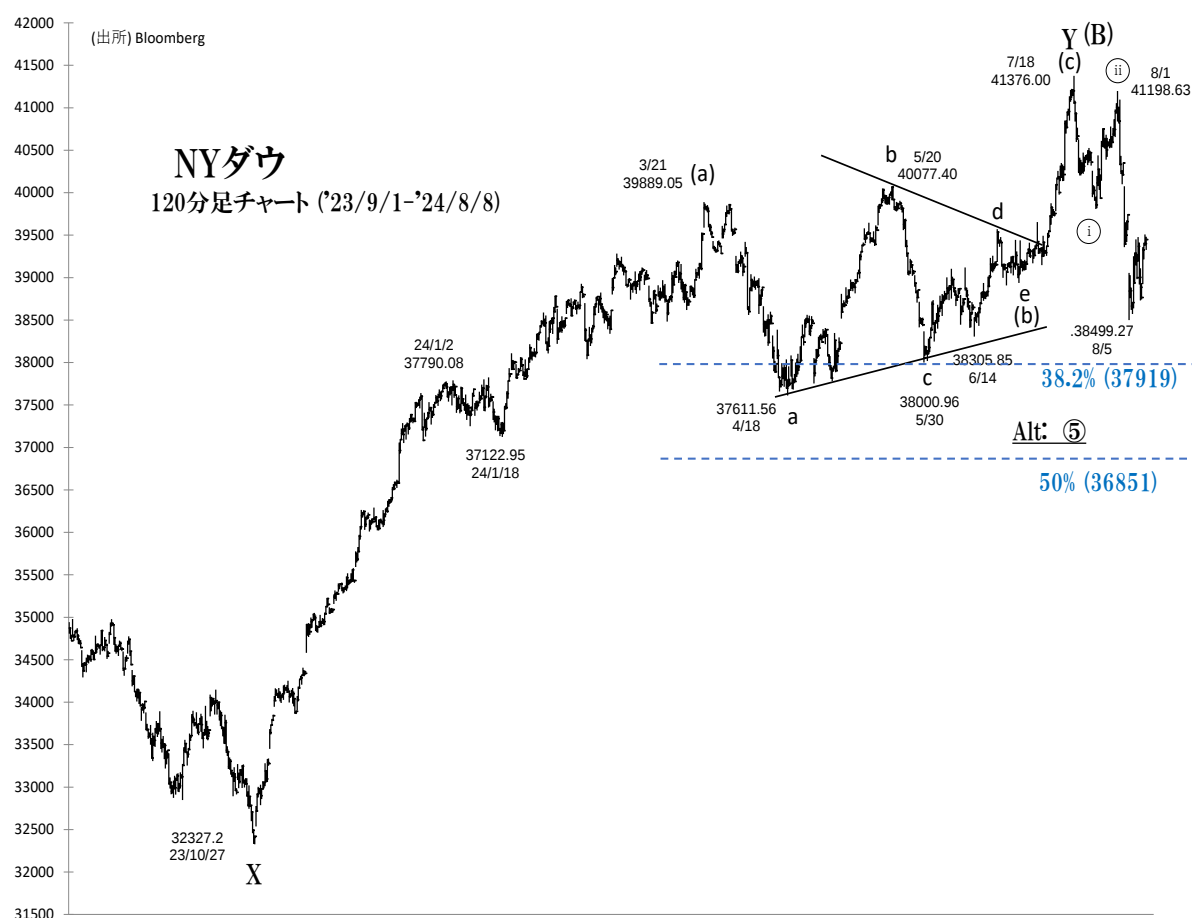
22 年 10 月 (28,660ドル) からの上昇は、プライマリー級④波中(B)波とカウントされ(あるいはプライマリー級⑤波)、それは完了したとみられます。この見方が正しければ NY ダウは、いずれ 22 年 10 月安値 (28,660ドル)を窺う展開となるでしょう。

41,376ドル(7/18 高値)からは、(C)波による下落とみられます。

当面のリバウンドを経て、200 日 MA※へ向けた下げとなるでしょう。現在 200 日 MA の辺りに、フィボナッチ比率からのサポートがあります。

※200 日 MA…38,051ドル(8/8)

[37,919ドル]…23 年 10 月安値からの上昇に対する 38.2%押し

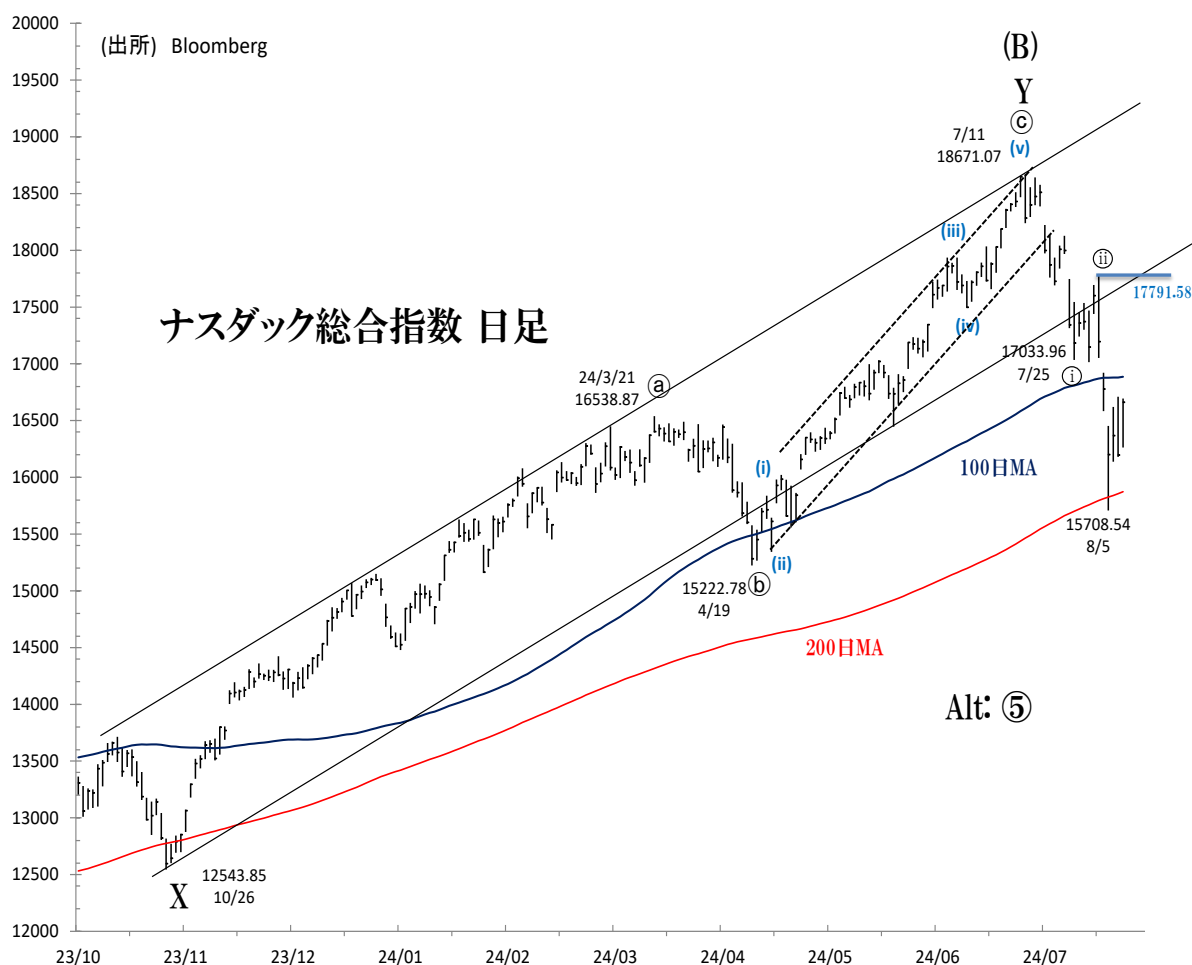


【NY ダウ時間足・エリオット波動分析】

41,198ドル(8/1 高値)からは、マル iii 波による下げとカウントできます。

このマル iii 波は、フィボナッチ比率の節目 37,919ドル(先述)や、3 月以降のトライアングル内安値 37,611ドル(4/18)などを、トライアングル中安値などを打診した後に、マル iv 波のリバウンド(保ち合い型)に入る可能性があります。

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

22 年 12 月からの上昇は、プライマリー級第④波における(B)波(あるいはプライマリー級第⑤波)とみられ、それは 18,671(7/11 高値)を以て終了したとみられます。以来(C)波による下げに入ったナスダックは、いずれ 12,500~10,000 へ下落する可能性があります。

8 月 5 日、ナスダックは 200 日 MA に達し、リバウンドに入りました。短期的には 100 日 MA※や、8 月 1 日~2 日に空いたマド(17,051~16,920)を試すことがありそうです。

※100 日 MA…16,886(8/8)

そんなリバウンドを経てナスダックは、下げ基調を再び強めるでしょう。この場合は 15,708(8/5 安値)を割り込み、15,222(4/19 安値)を試す展開が想定されます。

なお 8 月 1 日~2 日のマド埋めを果たした後もリバウンドが継続し、17,791(8/1 高値)を上抜くような動きに発展した場合、もはやリバウンドとみることは難しくなり、現在の弱気シナリオに代わる別の見通しが必要になります。



【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・日足エリオット波動分析】

5931(7/11 高値)からは(C)波による、下げトレンドに入った可能性があるとみています。

7 月高値(5931)から 8 月 5 日の安値(4290)まで下げ率は 27.65%に広がり、定義上の「**弱気相場**」(20%超の下げ)に入りました。

足元はリバウンドの動きとなっています。

4 月安値(4287)が下値の節目として強く意識されているようです。

短期的には、8 月 1 日～2 日に空いたマド(4801～4698)を埋めにいく局面でしょう。

マド埋めを果たすと、[4917-5111](7 月からの下落の 38.2%-50%)へ、さらにリバウンドが続くかもしれません。

一方 4287 を明確に下抜くと、次は 4000 処が試されることでしょう。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

2011年10月の75.570円以来の(A)-(B)-(C)[ジグザグ]による円安ⓧ波は、151.899円(22/10/21)を以て終わり、そこからはⓧ波の「円高局面(トレンドではない)」が進行中です。このⓧ波により米ドル/円(ドル/円)は、2028年4月頃までレンジ相場を形成していくでしょう。

161.938円(7/3)は、15年6月・125.860円から9年目に付けた「8年サイクル高値」とみられます。

それは波動カウンティックに、ⓧ波中 B 波高値(イレギュラートップ/不規則天井)に位置付けられ、このカウントによれば、いまはⓧ波中 C 波によるドル安・円高が進行中です。

22年10月以来のⓧ波が描くパターンとして大きくは、①[ランニング・トライアングル]、②[エクスパンディッド・フラット]、これら二通りの可能性があります。

①の場合、現行 C 波は A 波安値(127.158円)を下回リません。C 波は三波で構成され、2011年からの上昇チャネルのセンターライン(↑①)が強いサポートになるでしょう(週足分析では、この①に基づいています)。

一方②の場合には、現行 C 波(五波構成)はチャネル下限(↑②)を目指し、より大きなドル安・円高になることが見込まれます。



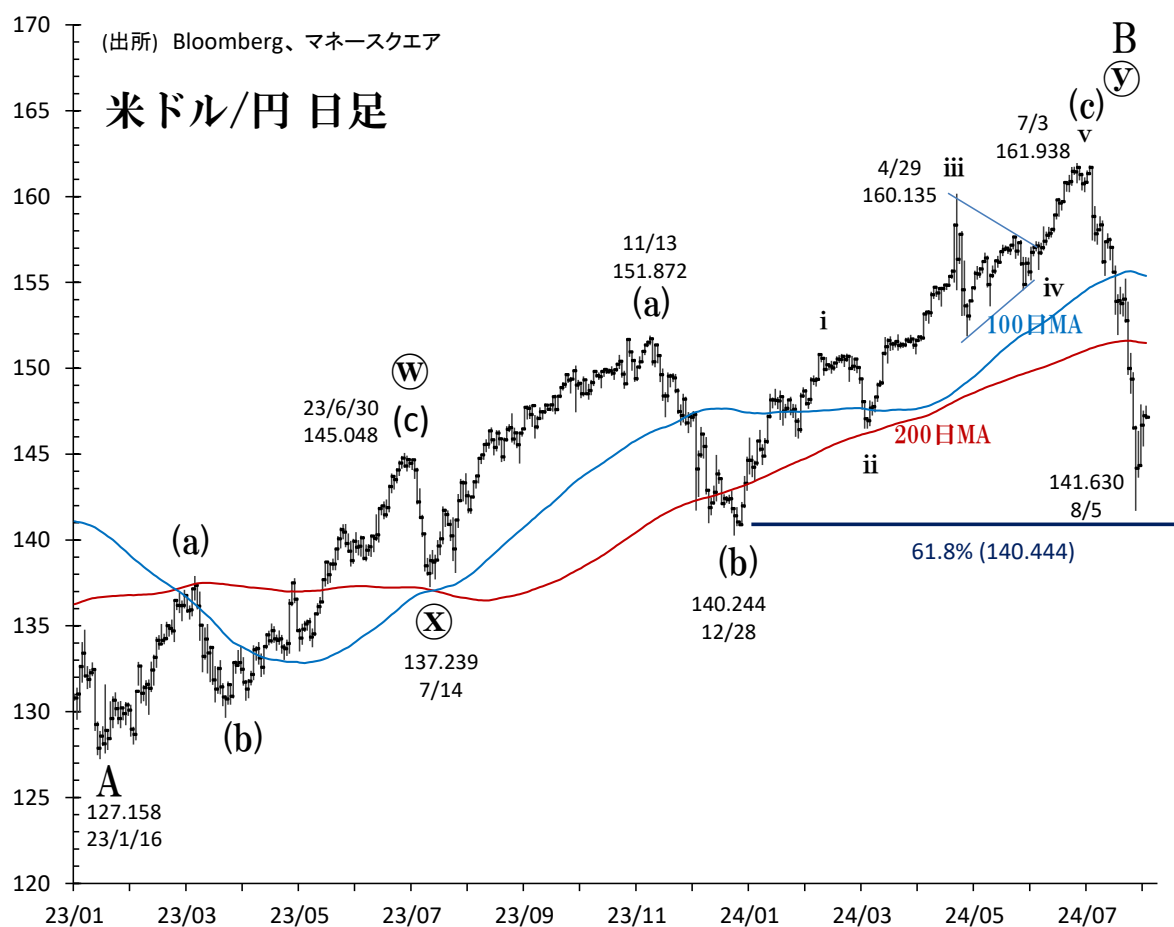
【週足・エリオット波動分析】

22 年 10 月 (151.899 円) からの A(↘)-B(↗)-C(↘) 編成において、23 年 1 月 (127.158 円) からの B 波は 161.938 円 (7/3) を以て完成しました。それは A 波開始点を上回る、不規則天井 (イレギュラー・トップ) でした。

161.938 円 (7/3) からは C 波によるドル安・円高です。

C 波の長さについては、A 波が有効な「ものさし」になります。

A 波の長さは 24.741 円 (およそ 25 円) でしたから、C 波の長さも同様と考えると、**137 円辺り (厳密には 137.197 円) が C 波のターゲット**です。



【日足・エリオット波動分析】

8月5日に米10年長期金利は一時3.6653%と1年1カ月ぶり低水準となり、日米金利差はさらに縮小しました。それに伴い、この日のドル/円は一時141.630円まで下げ、金利差からみた「本来あるべき水準」に収れんしました。

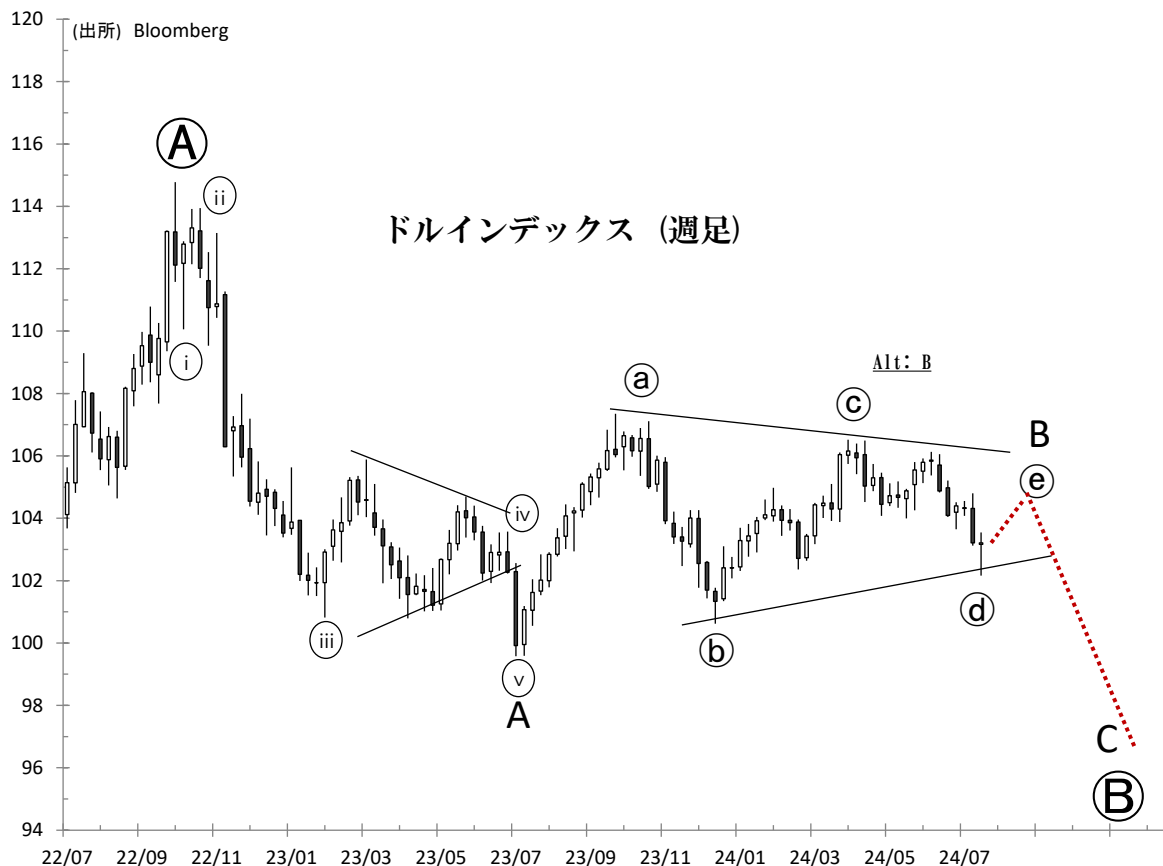
[日米実質金利差による推計値]・・・146.430円

円キャリートレードの巻き戻しはひとまず一巡し、戻りを試す局面に入った、とみてよさそうです。

ドル/円は短期的に、7月からの下げに対する38.2%-50%戻り[149.387円-151.784円]を試してもおかしくないでしょう。



ドルインデックス (ドル指数)



【週足・エリオット波動分析】

22 年 9 月高値(114.778)以来、ドルインデックスは A(↘)-B(↗)-C(↘)編成による下落基調にあります。
23 年 7 月安値(99.578)を起点とする B 波は、トライアングル(a-b-c-d-e)を形成中です。

足元は㊟波のドル高局面とみられます。この見方通りなら、まもなく B 波は完成し、その後に到来する C 波によって、ドル指数は 23 年安値(99.578)を大きく下回るでしょう。

派生的な見方として、「トライアングルは 105.915(6/21)を以て既に完成しており、そこからは C 波によるドル安が始まっている」というものがあります。

いずれにしても、今後の大幅なドル安が想定されます。

ただし 106.517(4/16)を上抜く動きとなったときは、短期的なドル安見通しはいったん撤回され、別のオプションが必要になります。

※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
